

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター
企業リサーチグループ 主任研究員 山本 桂宏



『INNOVATION STACK』

(イノベーションスタック)

だれにも真似できないビジネスを創る』

●著者 ジム・マッケルビー 訳者 山形 浩生 出版社 東洋館出版社 価格 2,090 円 (税込み)

『進撃の巨人』という人気漫画が、最終回を迎えたというニュースが昨年ありました。この漫画は、城壁に守られた街に住む主人公が、城壁を越えて、巨人のいる世界へ向かう話です。今回ご紹介する本書もまた、既成概念という城壁都市を出た作者が、巨人を倒す話です。ただし、その巨人は誰もが知るアマゾンです。

本書を読んでいくと、まず、起業家の自伝として魅了されます。

作者は、独自の決済システムを発明し、有名になります。このシステムを簡単に説明すると、iPhoneを用いたクレジットカード決済システムです。システムですから、ハードとソフトそれぞれが必要です。作者は、機器を構成する部品調達のために、中国に1ヵ月滞在したり、プログラムが書ける仲間を引き入れたり、様々に奮闘した結果、システムは具体化します。このシステムが登場するまでは、小口商売の決済は、小切手か現金が中心でした。つまり本書は、この不便を解消した作者のサクセスストーリーなのです。

自伝として読み進めると、興味深い部分があります。それは、なぜこの商売が登場しなかったのか、また誰も思いつかなかったのか、という冒険の出発点に、言及していることです。

少し先走ると、類似サービスが存在しなかった理由は、カード会社による見えない規制でした。その規制を作者が創意工夫で乗り越えていく様子は、痛快です。このように、壁を越え、冒険をした者の自伝として本書は好感が持てるのです。

次に、本書をビジネス書と見るのであれば、巨人アマゾンに倒したというレポートとしての解釈です。作者の独自の決済システムが普及すると、ライバルが現れます。その最大のものがアマゾンです。ビジネス書としては、経営資源の乏しい者が、圧倒的な強者に対して、どう対応していったのか、という部分に注目すべきです。

作者は、イノベーションスタックという策で応戦します。これは、簡単に言うと、一つの問題を解決すると、次の問題が発生し、それを

解決して…と、どんどん問題解決に向けた発明が積みあがる状態です。本書は、読者にイメージしやすいように、複数の企業におけるイノベーションスタックについて丁寧に例示しています。

企業経営やその支援者の視点で本書を読むと、顕在化、もしくは潜在顧客がいることを確認した上で、Aをしたいのであれば、Bの問題が発生するため、それを解決する、そうするとCという問題が発生し…と、どんどん課題と発明が連続し、それが積み上がらないといけなく読み取れます。この積み上がりは、参入障壁です。よって、積み上がりが高くない限り、模倣され、競争優位を保てなくなると暗示しているのです。

本書でも、アマゾンが作者の独自の決済システムの攻略をあきらめたのは、この積み上がりが大きく、部分的にコピーをしても意味がないと理解したためです。このように、競争優位の確保の仕方、またその着眼点を事例分析として示している点で、ビジネス書としても良書です。

作者はアメリカ人であり、日本では、あまりなじみがない決済システムです。そして、作者はこの事業に至るまで別の事業をしていた経験もあり、全くの会社経営の素人ではありません。そのため、事業の勘所がつかめたのでは、という意見もあるでしょう。

しかしながら、その部分を割り引いても、新事業の見つけ方、小規模企業でも競争優位を作ることができるということを説明している本書は説得力があります。ぜひ一読をお勧めします。

【著者】

起業家、発明家、慈善家、アーティスト。スクエアの共同創設者の一人で、2010年まで経営会議会長、現在もその理事を務める。

【訳者】

評論家、翻訳家。開発援助関連調査のかたわら、科学、文化、経済からコンピュータまで広範な分野での翻訳、執筆活動を行う。